

母親の養育態度の子どもの発達への影響

——聴覚障害児2事例による研究——

野中 道代・星 龍雄・斉藤 佐和

I はじめに

一般に母親の養育態度は子どもの発達に何らかの影響を与えるであろうと考えられる。内須川¹⁾はその論文の中で Milisen の報告を引用して言語発達に影響を及ぼす要因を環境的要因と身体的要因に分け、環境的要因の一つに親子関係のあり方を挙げた。そして幼児の言語習得を左右するのは多くの場合母親であるとして、親子関係の言語発達への影響の仕方について述べている。また Spitz²⁾、Ribble³⁾ らは、乳幼児期の母子間の刺激の欠如や母親の分離がその後の子どもの情緒的発達に崩壊的な結果をもたらす例を挙げている。

親の態度の発達への影響は、子ども自身が何らかの障害をもっているという条件の下ではなおさら顕著ではなかろうか。例えば、Connor⁴⁾ は、レキシントン聾学校の乳幼児指導の中で、母親の養育態度の重要性を強調している。これは、言語能力が優れている子どもの母親は子どもを注意深く見守り、話しかけや接触が多くみられるという Connor 自身の日常の教育経験からの指摘である。そして特に母親と子どもとの eye-contact は言語習得の重要な要因の一つであると強調している。また星⁵⁾ らは聴覚障害乳幼児の教育には望ましい親子関係の成立が前提になると述べており、田中⁶⁾ もまた聴覚障害児の早期の言語習得に大切なことは両親（中でも母親）指導であるとして母親に対する home training を実施している。以上の指摘を待つまでもなく、障害の有無にかかわらず、乳幼児期の発達に母親が重要な役割を果たすことはすでに充分認識されていると言ってよいだろう。ただ、障害児の親子関係に関してみると、これまでの研究では一般的な次元で親の養育

態度の重要性が指摘されたにとどまり、実際の親の態度と子どもの発達との関係が具体的に充分検討されているとはいえない。このような関係は一定の時期を選んだ横断的な研究方法では必ずしも明らかにされる性質のものではなく、かなり長い期間を対象とした継続的研究法によってより正しく実情に接近しうるものと思われる。本研究はそのような観点から、一定期間の観察を主たる方法として、親の養育態度が聴覚障害児の発達、即ち言語発達や他の発達領域に対して、どんな影響を及ぼすかということを、具体的な事例に即してみたいと意図するものである。ただし聴覚障害児の場合に起ってくる特有の問題として、言語コミュニケーションの困難さから、母子間に相互不適応が比較的起りやすいということが Myklebust⁷⁾ などにより指摘されている。このような場合には、その困難を乗り越えて、まず母親に正常の養育態度に復帰させるような教育的ガイダンスが必要となる。本研究では事例の母親に対して実践された教育的ガイダンスにも言及し、その効果についても考えてみたい。本研究における事例としては、よりはっきりした変化の過程を得ることを期待して、観察当初の時点で、他の事例に比し全般的発達が目立って遅れており、且つ、母親の養育態度及び養育環境に特に問題があるとおもわれた2事例をとりあげてみた。

II 研究の方法

1. 対象児

東京教育大学附属聾学校教育相談乳幼2歳児グループ18名の内、相対的にみて子どもの発達に遅れがみられ、且つ母子関係がうまく育っていないとみられる子ども2名、K.N.及びN.K.を選

んだ。2名についての年齢、聴力損失の程度等については、結果の項で示す。

2. 期間

昭和50年4月—昭和50年12月

3. 方法と内容

観察法と問診法を併用して行った。生育歴、教育歴に関しては問診法で行なった。主に観察法で行ったのは、指導の過程でみられた母親と子どもの関係および子どもの諸発達である。ただ観察では十分な資料が得られない部分については、母親に対して問診を行った。母子関係及び発達について具体的には、次のような内容を取り挙げた。

(1) 母子関係について

指導場面において、子どもが何らかの問題行動を起こした時、直ちにその行動について記述し、さらにその時の母親の子どもに対する接し方についてできるだけ客観的に観察して記述した。その他、母親の子どもへの接し方で、他の母親と比べて問題になると思われる点があった場合は随時記録しておいた。

(2) 子どもの諸発達について

a) 運動、生活習慣、知的適応活動、社会

これらの項目については、Gesell⁹⁾、Illingworth⁹⁾、津守・稲毛¹⁰⁾の発達項目を参考に観察項目を決定して、1カ月に1回、個々の子どもについての行動観察を行い、それで資料が得られなかった項目については母親への問診を行って、各項目の発達が達成されているかどうかを評価した。

b) 指示・提示・表情・身ぶりによる表現、即時模倣

これらは、村田¹¹⁾を参考に項目を決定し、指導場面でそのような行為がみられるかどうかを観察した。身ぶりによる表現は、象徴的身ぶり、延滞模倣などを含む。また、T.V.の中的人物、身近な人の行動の直接の模倣は、即時模倣として記述した。

c) 音声言語

個々の子どもの音声の発達的な変化を、音声と有意義音声に分けて観察した。

d) 音への反応(事例2のみ)

事例2は、音を受容する段階で、著しく音に拒否する行為がみられたので、特に事例2のみこの

項目を設けた。

III 結果と考察

事例1

氏名：K・N(男)

生年月日：昭和47年10月18日

生育歴

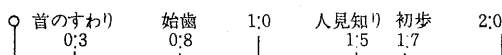
妊娠中：特記することなし。

出産：自然分娩、生下時体重 3,400g

新生時期：黄疸普通

乳児期：ミルクを飲む他は、眠っていることが多かったので、手がかからなかった。1歳前後には、人見知りはなかったが、1歳5ヵ月頃人見知りがひどくよく泣いた。

発達状況



既往歴：特記することなし。

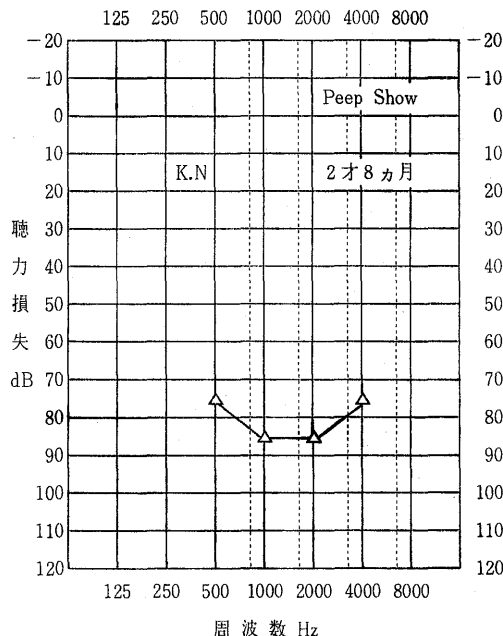
家族構成：父：41歳 血族結婚(一)

母：35歳

姉：6歳

本人

図1



補聴器装用年齢2歳4ヶ月

表1 母子関係について（文中の散歩、音遊び、粘土遊び、T・Vなどは指導内容を表わす）

月 齢	K・N 兄 の 行 動	母 親 の 行 動
32カ月—	○母親に椅子を運んできて、すわれと指示をする。	○散歩中、子どもが抱いてほしいと泣いても先に歩いて行ってしまい、知らん顔をしている。
33カ月—	○散歩中、おんぶしてもらおうと、すわっている先生の背中にしがみつく。（母親も先生と一緒にすわっている） ○音遊びや散歩の時、母親に抱かれようとして泣きだし、抱いてもらえないといつまでも泣いている。母親の代りに先生が抱くと泣き止む。 ○ぎこちないながらもおはしを使う。 夏 休 み	○粘土遊びでは、母親が1人で形をつくってしまい、子どもに話しかけたり、一緒にしようとならないので、子どももだまって見ているだけで粘土をいじろうとしない。 ○夏休み中、母親は子どもを抱っこしたり、一緒に遊んだりするようにと指導を受ける。
35カ月—	○おはしを使わなくなり、スプーンを使用 ○母親に抱っこしてもらいたがる。抱っこしてもらうと、降りるのを嫌がる。	○子どもが抱かれようとする、すぐ受け入れる。
36カ月—	○椅子にすわらず、常に母親のひざにすわりたがる。 ○見慣れない人に人見知りして、母親のうしろや机の下にかくれる。 ○積極的にかごめの遊びに入って、輪の中で目をつぶり鬼になる。 ○音遊びの時、母親のスカートにつかまってついてゆく。 ○T・Vや先生の動作の真似をさかんにする。 ○おはしてたべはじめる。 ○母親にたべさせてもらうことを要求する。	○音遊びの時、子どもが抱くことを要求すると抱いてやり、子どもと一緒に部屋の中を走ったりとんだりする。 ○子どもが抱っこちゃんとあだ名がつく位、母親に抱かれているので、母親は腕が痛いとかぼす。
37カ月—	○先生や、他の子どもの母親におやつをあげるふりをしてふざける。 ○椅子に1人でかけて、長い間すわってられる。 ○口に指をくわえて1人で音遊びをする。 ○一緒にグループの子どもに手をさしのべて遊びを誘う。	○音遊びに子どもが1人で参加するようになると傍で心配そうに見ており、終ると子どもに報酬を与えようと抱く格好をする。 ○親とはなれて、子どもが散歩に行くと帰ってくると、どうでしたかと心配そうに先生に尋ねる。
38カ月—	○椅子とりゲームで、最後まで勝ち残り、椅子の上に登ってバンザイをする。	○母親の表情が明るい。

相談歴

1歳頃、音に気づかないので不思議に思ったことがあった。その後1歳7カ月の時、近くの内科で診てもらったら、聴こえとことばに問題があるのではないかと言われた。二歳の時、某耳鼻科で難聴と診断され、東京教育大附属聾学校幼稚部の教育相談を紹介された。

教育相談開始時の子どもの状態

身体的状況一ひ弱な感じで年齢並みの歩行ができていなかった。

行動特徴一視覚に敏感であり、また絶えず、身の回りにある物をいじって、特定の玩具に固執する傾向があった。

聴力

図1に示す。

(1) 母子関係について

母子関係に関する観察記録を表1にまとめた。これを図式化すると図2のようになる。

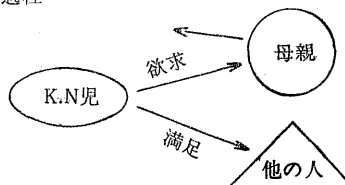
(2) 発達について

a) 運動・生活習慣・知的適応活動・社会

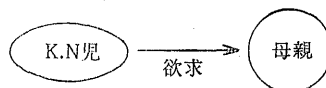
図一3に示す如く、指導開始時33カ月では、運動項目のとぶ、なげる、ける、のぼるなどの動作に、生活習慣項目の排泄、社会項目の子どもや大人との関係において著しい遅れがみられている。39カ月時では、特に社会面の改善が目立つ他、運動項目でも歩く、走るに関して長足の進歩がみられる。これは、指導内容の中に散歩などが含まれており、それによって発達が促がされたものと考えられる。しかし、他の運動項目は、年齢相応に達していないことが示されている。

図2 K・N児に対する母親の受容過程

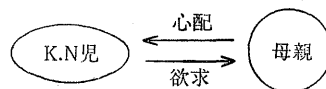
①図-子どもの欲求が、母親では満たされず、他の
①32ヵ月時
人によって満たされている。(母親に泣いて抱っ
こをせがむが、果たされず、先生が抱くと泣き止
む)



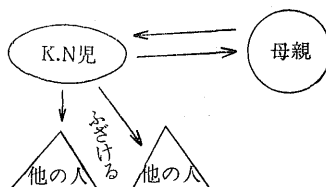
②図-教育相談担当者による母親指導によって、夏
②35ヵ月時
休み中、母親は、子どもを受け入れる態度をつく
ることに専念したようである。夏休み後は、子ど
もの欲求を受け入れることができるようになる。



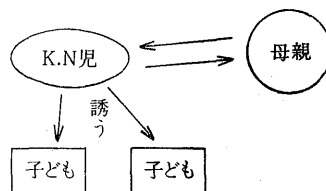
③図-子どもと母親の接触は、抱っこなどによって、
③36ヵ月時
濃密になってきている。
指導場面の中で、子どもは母親を離れて、出てく
ることができるが、母親の方は、子どもがはなれ
ている間気が気ではない様子である。



④図-子どもは母親を基盤として、周りの人に興味
④37ヵ月時
をもち始め、接触をもとうと、お菓子をあげるふ
りをしたりして、他の母親や先生とふざける場面
がみられる。



⑤図-母親と子どもがお互いに満たされると、さら
⑤38ヵ月時
に、子どもは、自分と同等の子どもに興味を持ち、
自分から、同グループの子どもに手を差しのべて、
遊ぎに誘ったりする。
母親の方も、子どもが離れることに不安をもたな
い。



b) 指示・提示・表情・身ぶりによる表現・即
時模倣

表一2に示されるように、表現する意欲がみら
れるのは、夏休み以後35ヵ月からで、身ぶりによ
る表現がさかんにみられるようになり、38ヵ月で
は、延滞模倣や象徴的身ぶりがあらわれるように
なった。提示とみられるような行動は、指導期間
内の観察では、特にみることができなかった。

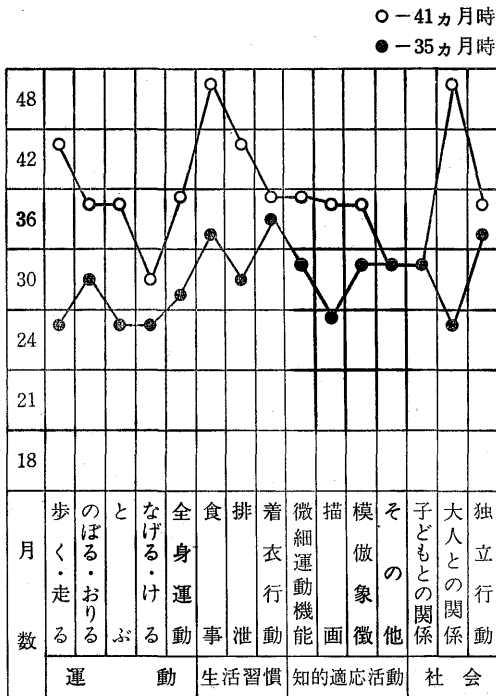
c) 音声言語

指導前半33ヵ月では、表一3に示されるよう
に、発声が少なかったり、発声の量にむらがみら
れる。夏休み以後の35ヵ月では、始終声を出すよ
うになり、母親がうるさがる程である。その後
は、声を目的的に使ったり、声に抑揚がついてき
たりして順調な発達をしていることがうかがえる。

考察

この事例では、指導の開始時と最終時では母子
関係に大きな変化がみられた。すなわち観察をは
じめた当初は、母親の態度は拒否的であったり、
子どもと真に接触せず独走的であったりしていた
が、最終の時期には、子どもとの接触も充分おこ
なわれ、且つ安定的分離も出来る程に母親自身が
成長してきている。経過からみて、その契機とな
ったのは恐らく夏休み前の教育相談担当者からの
働きかけであろう。この働きかけと休みの期間の
後、母親の子どもへの態度は積極的になり、子ども
の方からも母親を求めることが多くなってきた。
ここに教育的働きかけの効果を指摘できると思
う。ただ母子の接触が急に濃密になったことの反
映として子どもの行動には、一時的且つ部分的退
行現象がみられている(おはしの使用からスプ
ーンの使用に逆もどりしたり、歩行から抱っこを
せがむようになるなど)。しかしこれもやがて回

図 3 発達プロフィール



復しており、問題とする程ではなかった。いずれにしろこの夏休みの時期を境として子どもの行動にも、はっきりした変化があり、特に社会性、身ぶり表現、延滞模倣、音声の面での発達が目立ってきた。もちろんこれらは、子ども自身の成長、

他の子どもとともに活動する経験の積みかさねから導かれてきた所もあると思われるが特にこの事例では、母親の子どもに対する積極的な接触と受け入れの態度が、全般的に子どもの活動意欲を高め発達を促す力になったように思われる。そして母子関係の安定にともない、次第に他の大人や同グループの他の子ども達の行動への関心が芽ばえ、他児と何らかのコミュニケーションをとろうとする行動も出てきていることなどを観察すると、母子の関係が他者との関係の基盤となることが示唆されるのである。この事例の場合、子どもの発達に好影響を与えたと思われる母親の態度としては、①子どもを積極的に受け入れ充分な接触をしたこと特にスキンシップと呼ばれるような原初的な接触をいとわなかったこと、②子どもが集団での活動に参加するように、自分から積極的に努力したこと、又子どもが積極的に参加するようになったら、共に喜び、子どもを励ますように話しかけたこと、③後半において安定的関係が一応成立したあとでは、子どもの分離、子どもの自立の必要についても認識し、それを行動で実現できたこと、などが挙げられると思われる。

事例 2

氏名：N・K（女）

生年月日：昭和47年10月18日

生育歴

表 2 K・N児の象徴機能

月齢	32 カ 月	33 カ 月	35 カ 月	36 カ 月	37 カ 月	38 カ 月
項目						
指 示			○紙芝居の絵をアー といいながら指す	アーと云って 空を指す	バアといって部屋の ライトを指す	
表 情	○表情が乏しく泣 くことが多い		表情が豊かになりしかめっつらや 怒ったり笑ったりのふりをする			
身ぶりによ る表現			○T・Vのアニメー ションをみて終り の場面とわかり、 バイバイと手をふ る	○紙芝居ではみがき がでてくると口に 手をあてる ○人におやつをあげ るふりをする	○延滞模倣 画用紙を渡すと 折ろうとして1 週間前につくつ た紙ヒコーキを つくろうとする ○ラップを水差、 ホイッスルをコ ップにみたてて 水を注ぎ動作を する	
即時模倣			→○T・Vの子ども番組の動作のま ねや先生の動作のまねがさかん			

表 3 K・N児音声言語の発達

	33 カ月	34 カ月	35 カ月	37 カ月	38 カ月	39 カ月
音 声	発声が少ない ほとんどきかれ ない	アウアウファヤ ヤパーの喃語 発声量が不安定	ワー、バーバー などの発声が始 終きかれるので 母親がうるさが る程である		音声にイントネ ーションがつく 喃語が少なくな り目的的に声を だす	声を目的的に使 用する 喃語は殆ど消失
有 意 味 音 声				指で人やものを さしながらアア アア、バー、バ バ、パパなどい う	画を描きながら パーパープープ ーという	バアといって人 に頭を下げて挨 拶する

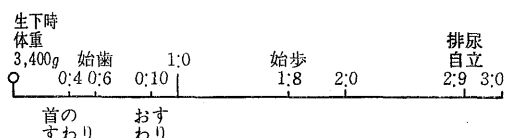
妊 娠 中：特記することなし

出 産：満期産，生下時体重 2,600g

新生児期：黄疸普通

乳 児 期：あやしても笑わないで，いつも無表
情だった。

発達状況：



既 往 歴：特記することなし

家族構成：父：42歳

母：34歳

兄：4歳 聴覚障害児

祖母（父方），本人

教育歴

兄が，当校の教育相談で指導を受けていたの
で，本児も1歳半から一緒に指導を受けていた。

教育相談開始時の子どもの状態

身体状況一歩行が充分でできず，母親の手につか
まって，2・3歩歩ける程度。

行動特徴一意志が通らないと，歯をくいしばり
床にひっくりかえって泣き，泣き寝入ってしまう。

聴力

図一4に示す

(1) 母および養育者との関係

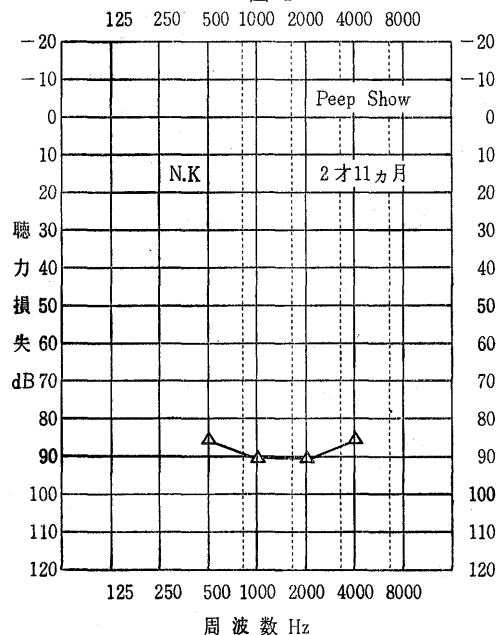
母および養育者との関係の観察記録を表4にま
とめてしめす。

(2) 発達について

a) 運動・生活習慣・知的適応活動・社会

図一5にみられるように本児35カ月時では，運
動項目なげる，ける，とぶの動作が，社会項目で

図 4



補聴器装用年齢 2歳

は大人との関係がおくれている。知的適応活動は
年齢よりもややおくれがみられる。指導後半41カ
月では，特に生活習慣項目の食事や社会項目の大
人との関係に著しい発達がみられる。

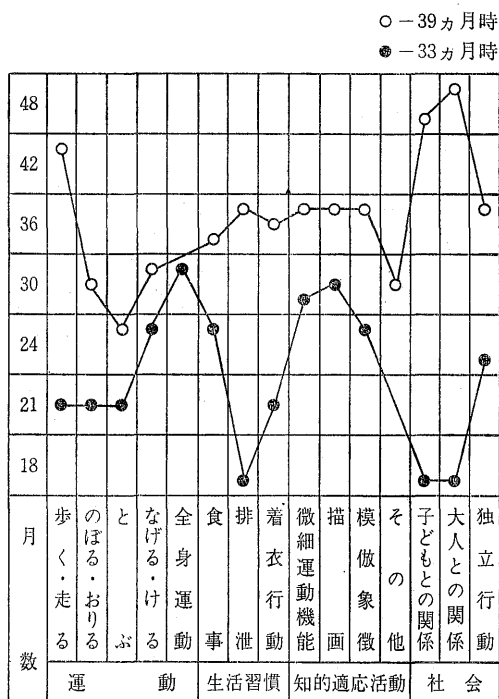
b) 指示・指示・表情・身ぶりによる表現・即
時模倣・遊び

表一5にみられるように，提示行動が指導場
面ではよくみられた。この提示行動は，人に何かを
してもらおうという依存的な場面が多かった。39カ
月頃から，模倣動作が盛んにみられるようになった。
身ぶりの象徴化（鳥の真似をするなど）は41
カ月で，はじめて観察された。更に同時期に叔母
を相手にごっこ遊びをよくするようになった。

表4 母及び養育者との関係について

月 齢	N・K 児 の 行 動	養 育 者
35カ月—	○引率の祖母がうまく遊びを踊れないためか、床の上にすわりこむ。 ○図工中、のりが机の下に落ちたことで泣きだし、自分で拾おうとしない。	学校—(父方)祖母と母親が交代でついてくる。 家庭—日中は母親が兄と学校へ行くので本児は近所の家に預けられている。
36カ月—	○運動具のマットと高さ50cm位の台を指さしながら頭をふって跳ぶことを拒否。 ○先生がボールをとってふざけようとしても意味がわからないのか、先生に向かって行動を起せない。	
38カ月—	○補聴器を両耳につける。 ○音遊びになると拒否する。さらに部屋の外へ泣きながらとびだして、母親を捜す。 ○皆と一緒に行動はできず、いつも一人だけおくれ後からついて行く。	学校—(母方)叔母と母親が交代でついてくる。 家庭—日中ほとんど、叔母(母親の姉)が相手になっている。
39カ月—	○音遊びになるとめそめそ泣きだす、しかし外へでることはなく、いすにすわってみている。 ○T・Vの子どもの番組は、ニコニコしながらみる。 ○母親と離れる時、バイバイと手をふって別れる。	
40カ月—	○音遊びは嫌がらず、積極的にするようになる。 ○自分の描いた絵をみてほしいと、先生の手にふれて指さす。 ○順番に並ぶことの意味がわからないらしく、トイレでうろうろしている。 ○走る競争では、一番最後からついてくる。	「子どもの相手になってあげることが遅すぎた。今は話しかければ声を出すようになったので楽しい」と母親自身反省している。
41カ月—	○下着をはかせてもらおうとして、先生の手にふれる。 ○遊び中、お面がはずれて落ちると、被せてくれるように先生の手にふれる。	

図5 発達プロフィール



c) 音に対する反応

本例の場合、聴力損失も大きく、さらにある時期、音に対して拒否行動がみられたため、特にこの項を設けた。

表一6にみられる如く、22カ月から29カ月の期間では、タイコやオルガンなど響きのある音を与えると音に対しては、はっきりした反応が認められ、喜びの表情を示したが、その後35カ月から39カ月の間では、そのような反応は次第に消失して、無表情になり音に対する拒否の行動が認められた。40カ月頃からその拒否の行動は次第に改善されてゆき、周囲の音にも反応する様子が時折観察されるようになってきた。

d) 音声言語

表一7の如く、積極的な発声が見られるのは、38カ月頃からである。39カ月、40カ月では盛んに声をだすことがみられ、41カ月になると、音声あらゆる場面に、目的的に使い始めてきている。

考察

この事例の場合は、母子関係そのもの以前に養

表 5 N・K児の象徴機能

月齢 項目	35 カ 月	36 カ 月	38 カ 月	36 カ 月	40 カ 月	41 カ 月
指 示	ダブルポインティング可能					
提 示	○物を拾って くれと泣い て示す			○先生に新しい ハンカチを渡 してニコニコ する	○先生に手をふ れて絵をみせ る	○物が落ちるべ い人の手にさわ って拾っても らう
表 情	○大人と目が 合うとニコ ニコする	○拒否する時頭 をふる	○T・Vをみて いて笑い顔や 声が出る	○表情が明るく なる		
身ぶりに よる表現				○隣りにすわっ ている子が T・Vの画面 のしぐさをす ておくれ てそのまねをす る	○T・Vの子ど も番組の画面 のしぐさをま ねる	○紙芝居の絵を みて寝る動作 をしてアーと いう。鳥の絵 をみてとぶ動 作をする ○隣りの子が椅 子をひくとま ねてひく
遊 び	○コップに砂 を出したり 入れたりの 一人遊びが 多い		○兄のまねをし てブロックを 積む	○兄が絵本をゆ ていると自分 も絵本をみる		○絵本をもって きて母親に読 むことを要求 する ○叔母になれて 買物ごっこを する ○料理をつくっ たつもりで人 にどうぞのし ぐさをする

表 6 N・K児の音に対する反応

月齢	22カ月	24カ月	26カ月	29カ月	35カ月	36カ月	38カ月	39カ月	40カ月	41カ月
反 応 の 状 態	○タイコ に反応 して輪 を投げ る ○スピー カーにつ いて、き をたしむ	○スピー カーの 前にす わらせ ると、 off に 反応す る	○オルガン の on-off に気づく (ひびき ?)	○小タイコ なええ と顔をし て喜ぶ ○ドラム と顔をク ンシャに して喜ぶ	○自信なげ に音源を 確かめ る ドラ ム (+)	○音遊びを 拒否 ○ドアのバ ンと音か らみだる ム (+)	○音遊びを 拒否 ○家庭でも 反応する 様子み られない	○音遊びに なるとめ そめそ泣 きだす	○音遊びに 嫌がらず に参加す る ○オルガン の on-off のみに反 応	○楽器・木 魚・ハー モニカ・ス トーンに 気づく ○母親が名 前を呼ぶ と気づく ○駅のアナ ウンスに 気づく

育環境に大きな問題がみられた。即ち、兄の聾学校の通学に母親が付き添うようになったため、観察開始の頃本児の登校の際の付き添いは、母親から祖母に代り、又家庭では近所の人に預けられることになった。他の子に比して、本児では、物を落しても拾おうとしないなど、大人に対しても依

存的な行動が目立ったが、これは一貫した保育者がなく、第3者的立場の大人によって世話される環境で過ごしている本児にとって、むしろ当然の行動様式ではなかったと思われる。このような環境的背景と本児自身の発達の遅れから、本児の行動は、すべての面において自信のなさが観察さ

表 7 N・K児音声言語の発達

月齢	24 カ 月	35 カ 月	36 カ 月	38 カ 月	39 カ 月	40 カ 月	41 カ 月
音 声	大分声をだすようになった母親に楽器を叩けと“アー”といながら指示する	ほとんど発声がかきかれない人の顔をみると口をパクパク動かす	かすかにウ・ウと先生に発する	マンマとはっきり先生に話しかけるように発する	アマアマと発する	ウマウマとさかんに声をだす	
有意味音声							「パパ・ママいただきます」に対し“ママママママ”と、いう。ワンワンブーブーというのを繰り返し繰り返す

れた。更に音、楽器遊びのような活動に際しては観察の中期において拒否の態度がみられ注目された（他の子どもにはほとんどみられなかった）。これらは第一には、本児の聴力損失程度の大きさからくるものと思われるが、加えて中等度難聴児である兄と同等の能力を期待する家庭での扱いにも原因の一端があらうと思われた。

しかし、これらの諸問題も、付き添者が母方の叔母に一定し、家庭にいる間も母の留守中はずっとこの叔母宅で過ごすようになってきてから、徐々に改善されてきた。この叔母はすでに自分の子どもの育児を終えた人であり、その育児態度はごく普通で、教育相談担当者からガイダンスされる方針にも積極的に協力する態度がみられた。こうして観察終期には、生活習慣も年齢以上の水準で確立し、叔母を相手にごっこ遊びに興じたり、嫌がっていた音、楽器遊びにも喜んで参加するようになったり、発声もさかんになったりするなど、本児の発達を示す行動が度々みられるようになった。まだ他の子どもとの交流はあまり観察されなかったが、皆と一緒にする活動には、遅れながら必ずついており、大人との関係が安定すれば、早晚他の子どもとの関わりもできてくるものと思われる。

本児の場合、母子関係以前の養育環境に問題があったわけだが、このような場合も代理の養育者に人を得、また一定してその人と生活できるようになったことで、子どもの発達にはかなりの好影響が与えられたとみてよいだろう。そして特に代

理の養育者が全面的に母親や教育相談担当者の方針に協力できる状態であったことが重要な点であったと思われる。

IV まとめ

事例1の母親では、観察期間中母親の養育態度に著しい変容がみられた。つまり、「母親が子どもを拒否している」「部分的に子どもを受け入れているがまだ充分とは言えない」「子どもを全面的に受け入れて子どもが親の元を離れようとする心配する」という変化である。しかもこれらの過程は、6ヶ月程の短い期間内で変化していた。三木¹²⁾は精神薄弱児をもつ親の子どもに対する障害の受容過程について、一段階は精神薄弱と言うことに半信半疑であり、二段階では部分的に認めるが全体的には認めない、三段階では精神薄弱の本質を理解するに至る、という三段階があるとしている。事例1の母親の態度も少なからず似たような段階的変化があった。しかしこの場合、障害そのものを本質的に受け止めたかどうかは更に障害の受容と言う観点から改めて研究をすすめるべきだと思う。

母親の養育態度の変容によって子どもの行動も著しく変容していくことは、事例1の場合は音声や身ぶりによる表現の増加などにあらわれていた。事例2では、母親の養育態度そのものの変化ではないが養育環境が落ちついてくることによって、子どもの生活習慣が確立してくること、身ぶりや音声による表現の発達も促されてくることな

どにあらわれていた。

これら2事例からみて母親が子どもの障害を受け入れて子どもと共に行動するという母親本来の姿に戻ることに、あるいは母親自身が全面的に養育にあたれない場合も、母親に代る養育者がその役割の一端を果すようになることだけでも子どもの発達には少なからず促進されるといえるように思う。これらの事柄については、現場で乳幼児を扱う指導者は、子ども自身の指導に先立つ基本的事項として、よく認識する必要があると思われる。

2事例から聴覚障害乳幼児を養育していく過程で子どもの発達一般、情緒的安定を助けるような好ましい養育態度としては次のような態度が考えられる。

1. 積極的に子どもを受け入れる。
2. 一定した養育者によって受け入れる。
3. 子どもの行為と一緒に参加する。
4. 子どもとのスキンシップを高める。
5. 子どもの集団活動に積極的に参加する。
6. 子どもと一緒に喜ぶ。
7. 子どもを励ますような話しかけをする。

但し、今回は、発達のにも遅れがあり、養育者環境にも問題があった2事例についてこのような結果がみとめられたのだが、このようなことが一般に指摘しえるかどうか、特に問題を持たぬ子どもの場合は、又別の態度が望ましいかどうかなど、これらは今後とも研究を継続して明らかにす

べき点であろうと考える。また母親は勿論、父親や家族に対する教育プログラムの作成を考えていくことも必要であろう。

文 献

- 1) 内須川 洸：児童心理学立場から主として、親子言語関係中心に 音声言語医学, Vol. 18, 1967.
- 2) Spitz: 母子関係の成り立ち, 同文書院, 1975.
- 3) Ribble: 乳児の精神衛生, 法政大学出版局, 1975.
- 4) Leo E, Connor: New Directions in infant Programs for the Deaf. The Volta Review, Jan., 1976.
- 5) 屋竜雄他: 聴覚障害幼児の教育に関する一考察——全般的発達の問題とその評価——筑波大学心身障害学系, 1977.
- 6) 田中美郷・小林英夫: 難聴児の早期 Habilitation と言語発達, ——第一報 Home training Program について——, 耳喉41巻11号・1969.
- 7) Myklebust: The Psychology of Deafness, Grune and Stratton, 1964.
- 8) Gesell and Amatruda: 発達診断学, 日本小児医事出版社, 1974.
- 9) Illingworth: 乳幼児の知能と身体の発達, 岩学術出版社, 1968.
- 10) 津守真・稲毛教子乳幼児精神発達診断法, 大日本図書, 1961.
- 11) 村田孝次: 幼児の言語発達, 培風館, 1968.
- 12) 大西誠一郎: 親子関係の心理, 金子書房, 1975

Summary

A Study Which A Nurture of the Mother Influenced in the Development of the Child

—Two Cases of Hearing Impaired Infants—

Michiyo Nonaka, Tatsuo Hoshi and Sawa Saito

As shown by the work of UCHISUGAWA, SPITZ and RIBBLE, the mother has great effects on the emotional and language development of the child. We have a study of 2 cases continuously observed through 9 months concerning a interaction between the hearing impaired infants and their mothers; a nurture of the mother gives much influence not only on the language development, but also whole development of the child.

Subjects :

2 infants ; who were chosen from 18 infants of 2 year—child group, appeared to be delayed in the whole development, not to go well reciprocal nature of mother-child interaction.

Techniques :

Mainly applying for the observation, complement for the question to mothers.

Results are as follows ;

Case 1—Shown remarkable change in the process of maternal acceptance ; a desirable acceptance of the mother stimulated in the development of the child, especially his ability of vocalization and his gesture.

Case 2—By getting aunt who took care regularly, the child got correcting her habits, then came to remarkable development in her gesture and verbal abilities.

A desirable mother described as follows ;

1. Active acceptance for a child.
2. Acceptance of stability for a child.
3. Joining in a child play.
4. More touching with a child.
5. Enjoying with a child.
6. Joining in group activities of a child.
7. Talking a child with praise.